

使徒言行録の第26章は、ローマ帝国ユダヤ総督フェストゥスと、ユダヤ王アグリッパ、とその妹ベルニケの前でパウロが語った長い演説、説教となっている。この後27章ではパウロはローマへと護送され、ローマに到着したところで使徒言行録は閉じられているので、この26章が、まとまった形で残されているパウロの演説の最後のものとなる。

1－11節

1－3節では、アグリッパ王による弁明の許可とそれに対するパウロの感謝の言葉が記されている。

4－8節でパウロは、自分は過去に熱心なファリサイ派であり、ユダヤ人のみんなが抱いている預言の成就への希望を抱いていることを語り、「神が死者を復活させてくださるということ」のために、ユダヤ人から訴えられていると語る。

9節から11節において、自分がいかに「ナザレのイエスの名に」反対し、迫害をしていたかを語る。10節の「多くの聖なる者たち」とは、キリスト者のこと。「彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしていた」。7章と8章1節にあるステファノの殉教の時もそうであった。「外国の町にまでも迫害の手を伸ばした」。9章2節以下にあるシリアのダマスコなど。

12－18節

パウロの回心のことは、9章1－19節、22章6－16節にも記されている。ただし、9章は使徒言行録著者の言葉で、22章とここはパウロ自身の言葉で語られている。

ここでは他の2か所にはない「とげの付いた棒をすると、ひどい目に遭う」という言葉がある。「とげの付いた棒」とは、牛をくびきに繋いで働かせる時に、そのかかとの後ろに取り付けた棒のこと。牛が飼い主に逆らって足をけりあげようすると、この棒についたとげによって痛い目にあう。それが、「とげの付いた棒をすると、ひどい目に遭う」ということ。つまり、この棒はそのように、牛を飼い主の思う通りに働かせるためのものである。

この言葉は、神様がパウロの飼い主として、彼をある方向へと歩ませ、ある働きをさせようとしておられたことを示している。主イエスが、ある使命のために彼を遣わし、用いようとしておられるのだから、その御心に逆らって足をけり上げても、自分が傷を負うだけだ、ということをこの言葉は教えている。

17-18節。主イエスがパウロを選び、彼を遣わす目的。

「わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである」。

19-23節

パウロ自身はこのような体験と主イエスからの使命に忠実であるだけなのに、ユダヤ人たちは自分を捕まえ殺そうとしている。しかし自分は「預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べた」のだと、自分の宣教の内容を語る。

ここにパウロが語る福音の大事なポイントが示されている。それは、主イエス・キリストの復活は、死者の中からの最初の復活であって、キリストを信じる者たちの復活の希望の根拠だ、ということ。

24-29節

パウロの言葉を遮って、総督フェストゥスは、大声でこう言った。

「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」

フェストゥスには、パウロが語っていることがとても正気の沙汰とは思えなかつたのである。パウロの語っていることは、この世の現実とかみ合っていない、現実離れした妄想だ、と言ったのである。それに対してパウロは、

「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。」。

「理にかなった」と訳されている言葉（σωφροσύνη、ソーポロスネー）の意味は、「頭がおかしい」の反対。つまり気が確かに、正気な、醒めた、分別のある、という意味。自分が語っていることこそ現実を本当に醒めた目で正しく捉えているのだ、とパウロは言っている。

ここには、現実とは何か、現実を正しく捉えるとはどういうことか、をめぐる対立がある。パウロは、主イエス・キリストの十字架による罪の赦しと、復活による私たちの復活の希望を語り、これこそが本当の現実であり、現実を正しく捉えるとはこのことを知ることなのだと言う。フェストゥスは、そういうことを信じるのは現実離れした妄想であって、おまえは現実を正しく捉えることができなくなっている、と言う。

30-32節 尋問を終えた後、アグリッパ王、フェストゥス総督、ベルニケ、陪席の者たち一同はパウロが無罪であると話し合う。